

学習者によるメディア特性の理解の類型化

Typology of Students' Understanding of Media characteristics

後藤 康志

Yasushi Gotoh

新潟大学教育・学生支援機構

Institute of Education and Students Affair, Niigata University

〈あらまし〉 学士に求められるジェネリックスキルとして、学士レベルでのメディア・リテラシー、言い換えると業務や研究、学習に必要な資料を的確に収集する能力が考えられる。一方、そのような場面で、信頼性よりも簡便性や嗜好性を重視する傾向も見られる。本研究はAHPを用いて学習者個々のメディア特性の理解を可視化・類型化を試み、暫定的に、信頼性重視タイプと簡便性・嗜好性重視タイプに類型化した。

〈キーワード〉 メディア・リテラシー 批判的思考 メディア認知 メタ認知的知識
高等教育 質保証

1. はじめに

1.1. 学士に求められるメディア・リテラシー

21世紀はグローバル化が進展し、さまざまな知識や情報を活用して社会に貢献できる能力が求められる知識基盤社会が到来すると言われる。このような状況下において、人材育成はますます重要となり、とりわけ高等教育における質保証、すなわち学士としての求められる資質能力を確実に身につけさせる教育の実施が求められよう。

平成24年6月、文部科学省は大学教育改革実行プランを発表し、社会が求める人材像として「主体的に学び、どんな状況にも対応できる人材」を挙げ、そのような人材育成のために大学教育に求められることとして「答えのない問題」を発見し、最善解を導くために必要な専門的知識及び汎用的能力を鍛えることを挙げている(文科省,2012)。汎用的能力は学士力答申においては知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能と性格づけられており、具体的にはコミュニケーション・スキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力などであるとされる。これらジェネリックスキルの各要素は相互に関連している。

高等教育においては、各専門分野の専門性を超えて、問題解決能力やメディア・リテラシーといったジェネリックスキルを教育目標

として明示する例が増えてきている。新潟大学には42の主専攻プログラムがあり、それぞれに到達目標を設定しているが、これらの内容分析を行った調査(後藤,2011)によると文言は微妙に違うものの論理的思考力、問題解決力、課題や現状を把握する能力の育成をある程度共通に意図していることが示唆されている。本研究の関心はメディア・リテラシー育成にあるが、その中でも学士課程教育を修了した学士がもつべきメディア・リテラシーとは何かに焦点を当てる。いいかえると、市民生活に必要なメディア・リテラシーのみならず、その発展としての専門的な職務や研究において必要な高次元批判的思考を組み込んだメディア・リテラシーの育成を目指す。

今ここで市民生活に必要なメディア・リテラシーと専門的な職務や研究の遂行に必要なメディア・リテラシーを分けているが、これはあくまでも限定的で暫定的なものであり、明瞭な分離など出来ない可能性もあるが、ここでいいたいのは次のようなことである。メディア・リテラシーの構成要素の一つに批判的思考があるが、批判的思考は実際にそれを発揮するための技能・知識と、それをいようとする態度・傾向性からなると考えられる(Ennis,1987)。これは筆者の経験でもあり菅谷(2000)の事例にもあることだが、批判的思考を発揮するのはエネルギーがいることである。一日の業務や学業を終えてソファ

に座ってテレビや新聞を見ると、業務や研究、学習で資料収集するためにネットを操っているときでは、人が取る行動や態度は自ずと異なってくるように思える。くつろいでソファに身を沈めて見ているテレビから流れてくる情報が多少、偏っていたり他の情報と組み合わせないと評価が難しかったりしよう。まずは、基盤としての市民生活に必要なメディア・リテラシーが発揮されて、「これは信頼性が低いな」と思うかも知れないが、そこからいろいろな情報を組み合わせる情報の確かさを確認するとは限らない。むしろ、聞き流すであろう。

他方、これが業務や研究、学習で資料収集するという場面では、より信頼性の高いメディアや情報源を用いた確認が望ましい。手軽であるからといって検索エンジンから出てきた情報をそのまま採用して判断するのではなく、必要なら図書館に赴いたり、ILLで資料を取り寄せたり、専門データベースを活用したりして、資料収集することが必要になるだろう。本研究で対象とするメディア・リテラシーはこのような学生に必要なメディア・リテラシーである。

1.2. メディア特性の理解の類型化

筆者はメディア・リテラシーの構成要素を主体的態度、メディア操作スキル、メディア特性の理解、メディアに対する批判的思考に分け、その構造を検討している。構造方程式モデリングの結果、メディアから主体的に情報を得ようとする者はメディア操作スキルが高くなり、メディアを活用する事によりメディア特性の理解が深まり、メディアに対する批判的思考が高まるというモデルを作成することができた(後藤,2006)。メディアの特性を理解することが、適切なメディアから信頼性のある情報を得る上で必要なのである。業務や研究、学習で資料収集するという場面において、どのようなメディア特性に考慮すべきであろうか。

筆者はメディア・リテラシーの構造について検討する以前、メディアに対する先有知覚研究(Clark,R.E,1983;Krendle,K.A,1986;佐

賀,1983;佐賀,1993;白,1992;今井,1993;後藤・生田,1999)に取り組みしており、メディア特性として簡便性(情報を得やすい)、信頼性(情報の信頼性が高い)、速報性(情報が新しい)、嗜好性(使うのが好き)を取り上げて、検討してきた。また、最近多くの人が検索エンジンを使って情報を得るようになっており、検索性(情報を検索しやすい)という特性が重要となろう。

以上をメディア特性とし、実際に活用するメディアをWeb,図書,テレビ,新聞, Twitter & Facebook としたとき、「仕事や学習に役立つ最新の情報を得る」という目的において検索性、速報性、簡便性、信頼性、嗜好性を大学生がどれほど重視するかを階層分析法(AHP: Analytic Hierarchy Process)を利用して調べた。結果として、平均的には信頼性を重視するものの、学生個々のデータを見ていくと、信頼性に重きを置く学生は多いものの(図1)、極端に簡便性を重視する学生も見られ(図2)、いくつかのタイプに分類できる可能性が示された(Gotoh,2012;後藤2012a)。

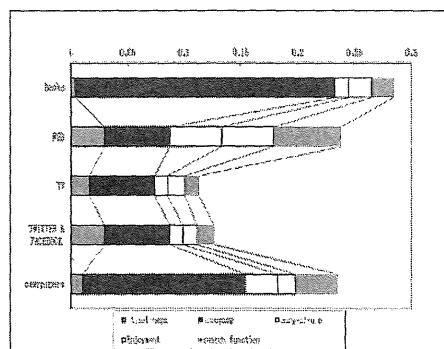


図1.信頼性を重視した学生 A (gotoh,2012)

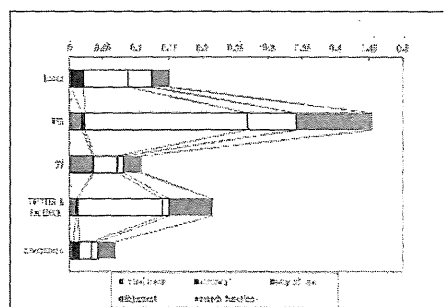


図2..簡便性を重視した学生 B (gotoh,2012)

こうしたメディア特性の理解は学生にとっては可視化されたメディア利用の方針と言い換えることも出来る。こうしたいわば建前としての方針と、本音とでもいえるメディア接触を対比させ、自己のメディア行動を省察させることが、メディア・リテラシー育成に資すると考えられるが(後藤, 2012b), そうした実践を行うためには学生のメディア特性の理解の個人差がどのように類型化できるかが有用な情報となると考えられる。

2. 目的

「仕事や学習に役立つ最新の情報を得る」という目的において、検索性、速報性、簡便性、信頼性、嗜好性といったメディア特性を大学生がどれほど重視するかについては個人差が大きい。そこで、本研究では、メディア特性の理解の類型化を試みる。

3. 方法

3.1. 対象及び調査時期

対象は「メディア論」を受講したN大学の学生57名である。調査期間は2012年2月26日～3月18日である。

この調査対象は, Gotoh(2012)の調査対象の一部である。今後, 本研究データを用いてメディア接触(後藤, 2012b)との関係を検討することを考えているが, メディア接触に関するデータが一部欠損していることから, 以後の検討で利用できるデータのみで解析する。なお, 後藤(2012c)でも同様な分析を行っており, 結果に影響を与えていないか検討を行う。

3.2. 分析

3.2.1. 基準のプライオリティの算出

目的を「仕事や学習のために必要な最新の情報を集めるため」, 基準を検索性, 速報性, 簡便性, 信頼性, 嗜好性, 代替案をWeb, 図書, テレビ, 新聞, Twitter & Facebookとする階層分析法(AHP: Analytic Hierarchy Process)を行う。

具体的には図3の通り目的から見た基準の一对比較を行う(高萩・中島, 2005)。

Q1「仕事や学習のために必要な最新の情報を得る」という観点からいうと、

		と ても 左 の ほう が 大 切	や や 左 の ほう が 大 切	ど ち ら と も い え な い	や や 右 の ほう が 大 切	と ても 右 の ほう が 大 切	
1	速報性がある	1	2	3	4	5	信頼できる
2	速報性がある	1	2	3	4	5	情報が得やすい
3	速報性がある	1	2	3	4	5	好き
4	速報性がある	1	2	3	4	5	検索できる
5	信頼できる	1	2	3	4	5	情報が得やすい
6	信頼できる	1	2	3	4	5	好き
7	信頼できる	1	2	3	4	5	検索できる
8	情報が得やすい	1	2	3	4	5	好き
9	情報が得やすい	1	2	3	4	5	検索できる
10	好き	1	2	3	4	5	検索できる

図3. 基準の一对比較

次に, 固有値法により一对比較表から各基準及び各代替案のプライオリティを計算する。表では, 幾何平均法による近似値を用いている。

表1. 各基準のプライオリティ(重み)

	速報性	信頼性	簡便性	検索可能性	嗜好性	λ1	λ1の逆乗数	算出プライオリティ
速報性	1	0.5	1	2	3	3	1/3	0.222222
信頼性	2	1	2	2	3	24	1/24	0.152778
簡便性	1	0.5	1	0.5	3	0.75	0.944088	0.152778
検索可能性	0.5	0.5	2	1	3	1.5	1/1.5	0.192308
嗜好性	0.33	0.33	0.33	0.33	1	0.011859	0.411916	0.077222
							5.773884	1

AHPにおいては, 代替案(メディア)についても一对比較とプライオリティの算出を行った後, 各代替案のプライオリティ(評価値)を基準のプライオリティ(重み)で重みづけ平均をとり総合評価値とするが, 本研究で基準(メディア特性)に関心があるので, 言及しない。

3.2.2. 基準の関係の把握

まず, 基準(メディア特性)のプライオリティの相関分析により, 基準同士の関係を把握する。

次に, 基準(メディア特性)ごとに全体を高評価群・低評価群に二分し, 他のプライオリティの平均値に差を比較する。

4. 結果

4.1. 分布

4.1.1. 基準のプライオリティの平均値

基準のプライオリティの平均値を見ると, 信頼性のプライオリティを高く評価する者が多く, それに簡便性, 検索性, 速報性が続いている。

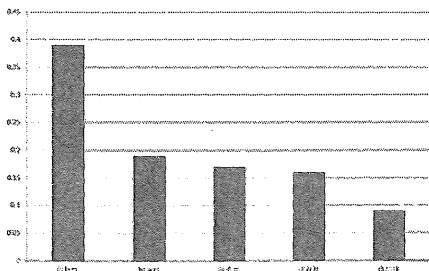


図4 基準のプライオリティ

4.1.2. 基準ごとの分布

次に、基準ごとの分布をみていく。

信頼性の分布(図5)を見ると、平均は.39, 標準偏差は.134であり、だまかに行って.40以上の群と、.40以下の群に大きく分かれること、相対には少ないものの、.30以下も一定数存在することが分かる。

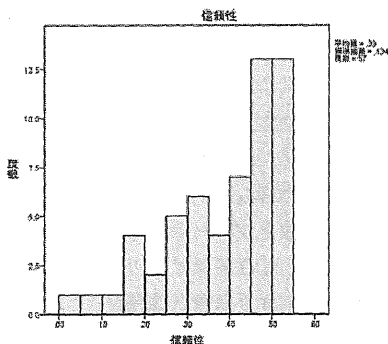


図5. 信頼性

次に、簡便性を見ると、平均値は.19ではあるが、.30以上に6名ほどいる(図6)。

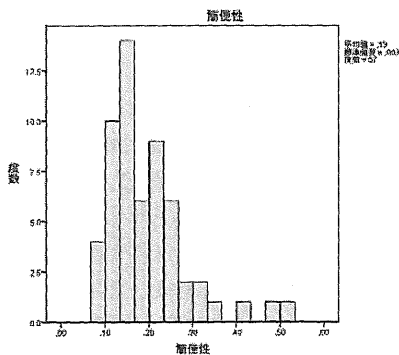


図6. 簡便性

次に検索性(図7)をみると平均値は.17ではあるが、全体としては.10付近と、.20付

近にやや分散している傾向が見られる。

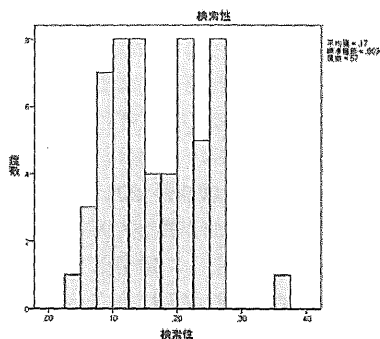


図7 検索性

次に速報性(図8)をみると、平均は.16, 分散は.081であるが、これも検索性を重視する.25付近と、それほど重視しない.10付近にやや分散している傾向が見られる。

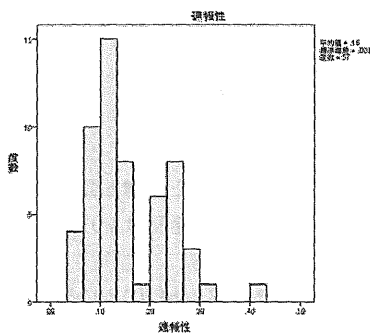


図6 速報性

嗜好性について平均値は.09であり、もっとも重視されておらず、概ね.10周辺に分布するものの、.30周辺に3名、.50周辺に1名といった形でいわば外れ値的に散在している。

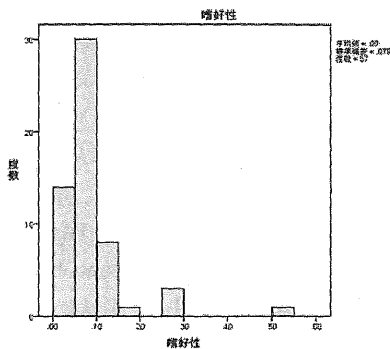


図7 嗜好性

4.2. 相関分析

次に、基準のプライオリティの相関関係を分析した(表2)。これを見ると、信頼性と簡便性の相関係数が-0.7であり、嗜好性との相関係数が-0.43である。これらは1%水準で有意な負の相関となっている。また、信頼性は速報性とも5%水準で有意な負の相関があり(-0.3)、信頼性のプライオリティが高い者ほど、簡便性、嗜好性、速報性は低い傾向がある。

また、速報性が高い者ほど、嗜好性、検索性は低い傾向もあるようである。以上の関係は後藤(2012c)と同じものであった。

表2 基準の相関分析

	速報性	信頼性	簡便性	嗜好性	検索性
速報性	1	-0.3*		-0.28*	-0.28*
信頼性		1	-0.70**	-0.43**	
簡便性			1		
嗜好性				1	
検索性					1

4.3. 平均値による2群の比較

次に、それぞれの基準の平均値を用いて上位群・下位群に2分割し、他の4つの基準の平均値の差があるかどうかを比較した(図8)。

まず信頼性であるが、信頼性下位群に比べて信頼性上位群の平均は簡便性、嗜好性、速報性において有意に低い(**p<.01)。これは相関分析における傾向と一致する。

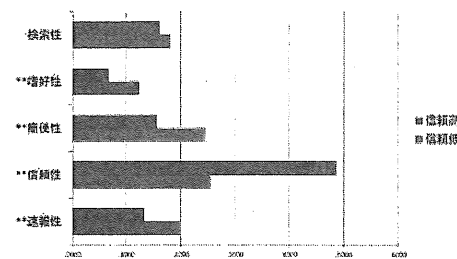


図8 信頼性上位群・下位群の比較

簡便性について(図9)、簡便性下位群に比べて簡便性上位群の平均は信頼性において有意に低い(**p<.01)。これは相関分析における傾向と一致する。

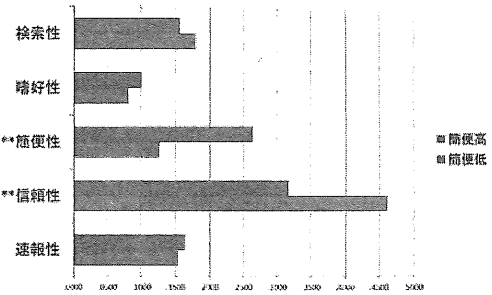


図9 簡便性上位群・下位群の比較

検索性(図10)については、検索性上位群と下位群の間に有意な平均値差のある基準はなかった。相関分析では速報性との負の相関があったが、検索上位群の速報性の平均値が検索下位群のそれより低いという関係は見いだせなかった。

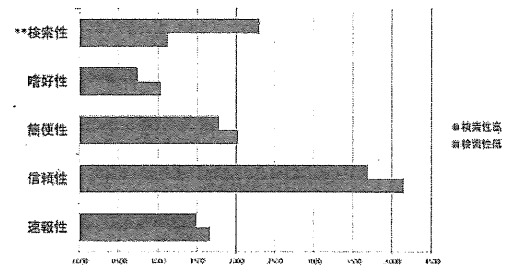


図10 検索性上位群・下位群の比較

次に速報性であるが(図11)、速報性下位群に比べて速報性上位群の平均は検索性において有意に低い(**p<.05)。相関分析では信頼性、嗜好性に有意な負の相関があったが、平均値差はみられなかった。

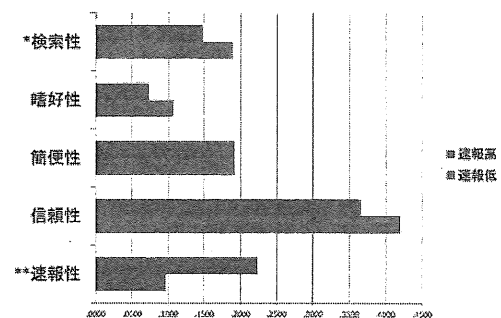


図11 速報性上位群・下位群の比較

最後に嗜好性であるが、嗜好性下位群に比べて嗜好性下位群の平均は信頼性、速報性において低く (* $p<.05$), 簡便性においては高い (* $p<.01$)。信頼性と速報性に関しては、相関分析における傾向と一致する。

5. まとめと今後の課題

以上をまとめると次のようになる。まず、業務や研究、学習で資料収集するという場面において最も重要と認知されている基準、つまりメディア特性は平均値の高さ、分布から見て、信頼性であるといえるだろう。

分析の結果を見ると、高い信頼性を求める学習者は、簡便性、嗜好性のプライオリティが相対的に低くなり、信頼性にプライオリティを置かない学習者は簡便性や嗜好性が相対的に高い。この傾向は比較的安定した結果として得られている

以上から、暫定的ではあるがメディア特性の理解を信頼性重視タイプと、簡便性・嗜好性重視タイプに類型化できるといえよう。簡便性・嗜好性重視タイプの学生が結果で情報収集の方法や考え方を修正できるよう仕組んでいく必要がある。

今回、「業務や研究、学習で資料収集する」という条件設定が被験者にとって十分に理解できなかった可能性もあるだろう。今後、被験者の属性（高校生や現職教員など）を多様化し、異なる属性の被験者の場合でも同様な傾向が見られるのか、検討していきたい。

謝辞：本研究の一部は、科学研究費助成事業（基盤研究（C）「メタ認知とパフォーマンス評価を組み入れた高次批判的思考力育成モジュール教材の開発」課題番号 24501179：研究代表者後藤康志）による助成により行われている。

参考文献

- 白南権 (1992) 学習メディアに対する先有知覚の機能に関する研究 日本教育工学雑誌 16(2), 107-117
- Clark, R. E. (1983) Reconsidering research on learning from media. *Review of Educational Research*. 53,445-459

Ennis, R(1987) A Taxonomy of Critical Thinking Dispositions and Abilities .Teaching thinking skills: theory and practice. Edited by Joan Boykoff Baron, Robert J. Sternberg. Freeman.

後藤康志(2006) メディア・リテラシーの発達と構造に関する研究. 新潟大学提出博士学位論文

後藤康志 (2011)ポートフォリオを用いた学生の学習支援. 新潟大学学習教育研究フォーラム当日配付資料. (未刊行)

Gotoh, Y.(2012) Visualization of understanding of media characteristics using the Analytic Hierarchy Process. Proceedings of 10th International Conference for Media in Education

後藤康志 (2012a) 学習者のメディア特性の理解の類型化の試み. 日本教育メディア学会大会講演論文集, 17-18

後藤康志 (2012b) メディア日記法によるメディア活動の記録. 日本教育メディア学会大会講演論文集, 149-152

後藤康志(2012c) AHP を用いたメディア特性の理解の可視化. 日本教育工学会研究報告集, JSET12(3): 31 - 36

後藤康志・生田孝至 (1999) 受信・発信メディアに対する児童の先有知覚に関する研究. 日本教育工学雑誌, 23 : 85 - 88

今井真悟 (1993) 児童のメディアに対する先有知覚と教師の指導法との関係 新潟大学修士論文

Krendle, K. A. (1986) Media influence on learning : Examining the role of preconceptions. *Educational Communication and Technology Journal* 34,223-234

佐賀啓男 (1988) 多メディア利用事態における学習者のメディア知覚と教師の役割 放送教育開発センター研究報告 9, 95-115

佐賀啓男 (1993) 中学生のメディアに対する先有知覚の性格と学習 視聴覚教育研究 23, 55-67